

京大外大図書館市民利用制度利用者

## 冬。京都の街から

安福 稔子

北緯73度、人類居住最北限地のノルウェー領の島、スバルバルの村に、素晴らしい図書館がある。村人たちは、用がなくても毎日のように図書館にやって来る。一杯のコーヒ一片手に雑誌を読んでも、共有している時間は深い。その深さを確かめるように、人々は、時々目を上げて、氷河の向こうのオーロラなどを黙って見上げる。彼らにとって図書館は、長く暗い冬の間、なくてはならないコミュニティーの場なのである。

ドイツ、ベルリンの荘重なドームに囲まれた石畳の広場は、いつ来ても静まりかえっている。かつて、ヒトラーは図書館から集めた、ヘッセやシラーなどの文学書を、ここで焼き捨てたという。石畳の一部は、今でもアクリル樹脂で覆われ、保存されている。ヘッセやカロッサを失った空っぽの書架を前にして、ヒトラーはどんな事を思ったのだろうか。

そして、京都の片隅で、私は、今日もせっせと自転車をこぎながら、京都外国語大学の図書館へ通っている。

図書館は、癒しの場所である・・・これは私がひそかに思っていることだ。大勢の人間が集まり、見知らぬ者同士、隣の席に座りながらも、心は互いに時空を超えて全く違う世界に遊ぶ事ができる。

学校の先生というのも、なかなか大変で、さまざまな思いや知識やエネルギーが「言葉」に姿を変えて、どんどん流れ出ていく。そんな日々が続くと、どこかで、何かを補充しなければ心や頭が乾ききってしまう気がするのだ。そんな時、図書館の持つ意味は大きい。

新聞で、外大の図書館が公開されるという記事を見つけて、すぐに申し込みに行った。極上の癒しの場所が、一つ増えて、私はとても嬉しかった。

もちろん、英語教育の実践集を読んで、授業に

取り入れたり、AET とのチームティーチングの教材も、外大の図書館にずいぶんお世話になったが、それでも、私には、心を遊ばせる癒しの場、という気持ちの方が大きかった。



ところが、ひよんな事から、この夏から秋にかけて、英語教育に関して、私はかなり気合いを入れて勉強せねばならなくなった。課題の本がいくつかあって、それを読まねばならない。相当高度な英文学と英語教育の専門書で、今更手に入りそうもない本もある。途方にくれながらも、外大で探してみた。すると、全部あるではないか！それどころか、本気になって探してみると、これでもか、これでもかと、それ以上の専門書までザクザクと出てくる。おそらく、外国語に関して、この図書館に無い本はないのではないかしら、と思うほどの充実ぶりであった。この時から、外大の図書館は、私にとって、単なる癒しの場所から、どんな資料もあつという間に提供してくれる、すごい力を持った宝の山ともなったのである。書庫には、まだ入ったことはないが、おそらく数多くの貴重な宝が眠っていることだろう。

この宝の山を気前よく、一般に公開してもらって、私は感謝の気持ちで一杯だ。申し込みの際にも、スタッフの方から、とても親切に頂いた。夜おそくまで、また土曜日でも利用できて、スタッフの方たちの勤務は大変だろうなと思いつつも、とても助かっているのも事実である。

冬の朝、北緯73度のノルウェーの図書館では、子供たちが、スタッフの童話の読み聞かせに耳をすまし、ベルリンでは、凍てつく石畳の広場を、通勤の人達が足早に横切っていく。地球を半周して、その頃、京都は夕暮れ。そして、その夕暮れを窓の外に見ながら、私は、外大の図書館で今日もゆっくり本を開けるのである。

やすふく としこ

京都府立北嵯峨高等学校（英語科教諭）